

John B. Keane の初期の戯曲を読む

児嶋 一男

1

人口約 4800 人 (2011 年統計) の町 Listowel は、ダブリンから約 260 km 西南に位置する。商店が並ぶ賑やかな町の一画の西端に、右手にハンチング帽を握って腰の下に置き、「ハロー」と挨拶しているように左手をあげた銅像が 2007 年から立っている。アイルランドで広く愛された作家 John B. Keane (1928–2002) である。

本稿はジョン・B・キーンの初期の劇作品を、伝記的事項とともに概観するものである¹⁾。

キーンは 1928 年 7 月 21 日、リストウエルの 45 Church Street に生まれた。John と命名され、洗礼を受けるが、後に聖体拝領式の際に、Kerry 地方の守護聖人とされる St. Brenndann (c. 484–c. 577) の名をいただいて、John Brendan Keane となる。

1923 年、公立小学校の教員であるキーンの父親 William (33 歳) は、リストウエルから 9 km 北東の地 Ballydonoghue の農家の娘 Hannah Purtill (21

1) 2012 年度に 1 年間学外研修の機会を得たので、アイルランド現代演劇のモチーフとして常に言及される、独立闘争、national identity、移民、土地への執着、地方の偏狭な精神、generosity など、まとめて Irishness と言われるものの実相を、読み解こうと試みた。本稿は、きわめて地方色の濃い作家と言われる John B. Keane の初期の戯曲数作品を対象にしたものである。引用箇所は「 」で示し、すべて拙訳である。

伝記的事項は主として 1964 年までのキーン自身の自叙伝 (回想録) である John B. Keane: *Self-portrait* (The Mercier Press, Cork, 1964) と、Gus Smith: *John B. the Real Keane: A Biography* (Irish Amer Book Co., 1998) を参照した。

歳)と結婚する。家にはウィリアムの5歳上の兄 Danny が同居していたが、家畜市場で収入を得ているダニーは、キーンにさまざまなお話をしてくれる伯父さんであった。

母親ハナーは、同居するウィリアムの妹 Julianne に手伝ってもらいながら、キーンの子育てに励む。また、ハナーは Cumann na mBan (アイルランド女性評議会——1914年設立のアイルランド共和軍の女性准軍事組織)に入っている活動的な女性でもあった。

ハナーの兄 Mick は IRA 地方部隊の設立に与した人物であったが、その体験談はキーンたちにとってはおとぎ話の英雄物語のようであった。しかし、母と伯父ミックがその活動からキーンに過激な反英意識を植え付ける、ということとはなかった。

1932年、キーン(4歳)は、父親の学校の幼児クラスに入学する。翌年、父親は Clounmacon (リストウエルの北東5km)に学校長として転任したために、父と同じ小学校にいたのはわずか1年であった。

1936年(キーン8歳)から5年間、Lyreacrompane (リストウエルの南方14kmの山間地)の Ivy Bridge に住む親戚 Sheehy 家に、夏休みの間だけ滞在する。いとこの John Joe Sheehy の回想によれば、隣近所の人びとが家に集まって来ては、夜通し物語りが繰り広げられていた家であった。豊かな story-telling が日常的であった土地柄と時代で、結婚式の祝いに The Straw Boys (藁の面や藁の衣装を着けた旅回りの一座)がやって来たり、結婚の斡旋屋 (matchmaker) が活躍していたという。

ここで初めて結婚の斡旋屋を見たキーンは、70歳位の老人が嫁に斡旋できる女性を探しに、仔馬の牽く荷馬車に乗ってやって来たことを覚えていると回想している。

1938年、キーン(10歳)は、リストウエルの自宅から歩いて5分程の所にある St. Michael's College に入学する。ここでやんちゃが過ぎたとはいえ、司祭先生たちによって科されたきつい体罰の記憶とそれに対する激しい嫌悪感は、大人になってもなお消えなかったと言う (*Self-portrait*, p. 16)。

18歳で学校を終えてから3ヶ月間、家禽類を販売する仕事に就いたキーンは、屠殺や売買する肉の値踏みも専門的にできるようになる。詩が地元紙に掲載されたり、土曜の夜の楽しみに、町から北西に約15kmの Ballybunion に

ダンスに通り始めたのもこの時期である。

次兄イーモンが、A. J. Cronin (1896–1981) の小説 *Hatter's Castle* (『帽子屋の城』、1931) を脚色した素人演劇に端役(金貸しの役)で出る。やがて、イーモンは演劇関係の道に進み、ダブリンのアベイ劇場一座に入る。母親ハナーは若い頃に素人劇団で女優をしたことがあるせい、比較的鷹揚にとらえていたが、地方の町の教員である父ウィリアムは、二男の進路選択に不安を覚える。

キーンはリストゥエルで、薬屋の見習いの職に5年間就き、薬瓶の洗浄から薬の調合まで覚える。両親は息子の安定した職と生活に安堵するが、キーンはアイルランド式フットボールとラグビーに夢中になりながら、自ら書くことに興味を覚え、*The Kerryman* 紙の記者に応募する。結果は不採用であった。

この時期キーンは、友人と地方紙 *The Listowel Leader* を発刊するが、町の議員を批判したせいで広告主が離れ、創刊号で廃刊となる (*John B. the Real Keane*, p. 35)。

この前後から、キーン(20歳)は演劇に興味を覚え、The Willie Brothers 劇団を作り、歌と踊りの入った一幕劇 *The Ghost of Sir Patric Drury* を上演する。

1951年(キーン23歳)、総選挙の前月、友人らと架空の候補者 Tom Doodle を作り出し、ある俳優にドゥードルを演じさせ、架空の演説会に大勢の聴衆を集めるといふ悪戯をする。

薬屋には Brendan Behan (1923–64) が訪ねて来ることがあった。薬屋の従業員 Michael Quille が、IRA の活動家として服役していた時に知り合ったということであった。キーンと一緒にパブに行き、自作の詩をピーアンに朗読して聞かせたことがあった。

1951年9月、キーンはダンス・パーティで、Knocknagoshel (リストゥエルの南東20km) 出身の Mary O'Connor (19歳) と出会う。メアリーの母はメアリーが2歳の時に出産がもとで他界(36歳)、父親はメアリーが12歳の時に亡くなっていた。メアリーは Castleisland (リストゥエルの南30km) にある家政専門学校をやめて(17歳)、同町の美容院で見習い美容師となっていた (*John B. the Real Keane*, p. 39)。

キーンは結婚資金を稼ぐために、イギリスに移住する決意をメアリーに伝える。多くの若者がその後アイルランドに戻って来ない例を知っているメアリーは不安になる。

当時リストウエルの駅は、親しい人が移民に出て行く時の別れの場でもあった。その様子は、1961年初演の *Many Young Men of Twenty* (『多くの二十歳の若者』) の背景などに描かれている。

2

1952年1月6日、キーンはダブリン行の列車に乗る。ダブリンに着いたキーンは、兄イーモンに見送られて、Dún Laoghaire から船でイギリスに向かう。ダン・リアリーの港や船上で感じた数多くの人びとの別れと孤独感、それを共有する移民同士の互いに助け合う姿、それを見る都会の人びとやイギリス人の無慈悲な見下すような目は、生涯忘れられず胸に残ることとなる。

Holyhead から列車でロンドンに着き、数日ロンドン観光や観劇の後、キーンは Northampton にいるいとこ Denis Murphy を訪ねる。下宿先でいきなり夫人の Beryl Atkinson に「“Paddy” はお断り」と言われ、「“Jock” です」と答えざるを得ない経験をする。当時、アイルランド人労働者は大酒飲みで喧嘩早い、という理由から「アイルランド人お断り」という張り紙をしている下宿屋が少なくなかった。その下宿には、自分とマーフィ以外に3人の同郷人がいて、後日アイルランド人であると知れて追い出されそうになるが、キーンらは「例外」ということで難を免れる。その後この下宿から追い出されたポーランド人を見て、帰るべき故郷の無い者の途方に暮れた様子に、キーンは深く感じ入る。

ノーサンプトン到着3日後、薬局に職を得る。しかし、店主のアイルランド人嫌いに嫌気がさして辞める。マーフィの誘いでイギリス海軍に入ることを試みるが、自身をイギリスの「臣民」と記載することに、アイルランド人として耐えられず、入隊を止める。

ノーサンプトンに戻り、新しい下宿屋に移り、道路清掃の会社に2カ月間勤める。この間に小説を書いて投稿するが、採用はされない。この後、数回下宿を変わった後に、元の下宿の主人 Henry Atkinson の紹介で、British Timken 社に就職する。その後、同社のベアリング工場で、鉄鋼炉工員として2年間働く。この溶鉱炉の労働者はすべて外国籍の者だった (*John B. the Real Keane*, p. 42)。

下宿のアトキンソン夫妻はキーンに親切であった。キーンは酒を控え、自分の部屋で詩や物語やラジオ劇を書いては寂しさを紛らわせ、せつせと投稿する。

ただし採用はされなかった。

アイルランド人を嘲笑するイギリス人、イギリス人への敵意を露骨に言動に示すアイルランド人、それぞれいることはいたが、キーンには普通のイギリス人の大半は、下宿の主人夫婦のように、本質的には友好的で、敵視するような人たちではなかった。

同じ出稼ぎのアイルランド人の中には、稼ぎの大半を酒と賭け事に費やす者もいたし、イギリス妻と称する女性と住んでいる者もいた。ここで見聞きしたアイルランド人移民の苦境は後の作品に描かれることになる。

休日には The Northampton Repertory Theatre に出かけて、George Bernard Shaw (1856-1950) や Oscar Wilde (1854-1900) の劇を観た。Seán O'Casey (1880-1964) の *Juno and Peacock* (1924 年初演) を初めて観たのもこの劇場であった。

ある日、鉄鋼炉労働者の一人が急死した。これを機にキーンはノーサンプトンを出て、ロンドン市内の酒場で働くようになる。この時に知り合った建築労働者の人びとは、学校教育は足りていないが、気の置けない人たちであった。

The Irish Independent 紙の求人広告に応募して、コーク市の西北 Doneraile (リストゥエルの東南 80 km) の薬屋の助手に採用が決まり、2 年間のノーサンプトン生活は終わりとなる。望郷の念とは別に、故郷アイルランドの宗教や社会風習には偏狭で息苦しいところがある、そう感じるがあったイギリス生活であった。

1954 年、アイルランドに戻ったキーン (25 歳) は、ドナレイル町の薬屋の屋根裏に住み込み、93 歳の店主の言いつけ通りに仕事をこなしながら、2 作目の小説を書き上げる。しかし、出版されるまでには至らない。*The Man from Clare* (『クレアから来た男』、1962 年初演) の主人公の名前は、ここで知り合い、親しい友人の一人となった Batt Crowley からきたものである。キーンは、国有林の監視員であるクロウリーに励まされながら、創作を続ける。

休日出勤手当が払われないことで店主との折り合いがまずくなっていた時、以前に助手をしていたリストゥエルの薬屋から申し出があり、1 年足らず暮らしたドナレイル町に別れを告げ、キーンはリストゥエルに戻る。

3

1955年1月5日、キーン(26歳)はメアリー(23歳)とノックナゴシエルの St Mary's Church で結婚する。すでに退職していた父ウィリアムの援助とメアリーの持参金(銀行から借りたもの)を自己資金に加え、キーンは 37 William Street にあるパブ The Greyhound Bar を購入する。店先に食料雑貨を置き、朝 9:00 から夜 0:00 まで、日曜の夜も(当時は違法だったので、裏口を出入り口にして、見張りを立て、取締りの目を逃れながら)営業をしていた²⁾。

パブの店主は反道徳的存在として目の仇にされることがしばしばあった。キーンは、パブの店主もまた神の創り賜いし存在であると思うことにしていた——必ずしもすべてのパブの店主が道徳的・倫理的に完璧な人間とは言えない。それは、すべての人間が完璧と言えないのと同じである。人間は完璧ではない。だから、不完全な存在である人間の胸の痛みを深く思いやることが大事である——この人間観こそキーン作品全体に通底するものである (*Self-portrait*, p. 83, p. 95)。

キーンの生活は、パブ(兼雑貨販売)の店主、地元のフットボール選手、散歩、Feale 川での釣り、すべての客が帰った後の深夜 0:00 過ぎから 3~4 時間の執筆というものであった。

1958年、キーン(29歳)作ラジオ・ドラマ *Barbara Shearing* が Radio Éireann で放送される。パブに集う人びとがそのまま作品に出てくる、そう思われる作品であったという。

1959年2月2日(キーン 30歳)、舞台劇の処女作 *Sive* (『サイヴ』)が、リストウエルの Walsh's Ballroom で、地元のアマチュア劇団 The Listowel Drama Group (1943年旗挙げ)によって上演される。

『サイヴ』——1950年代後半の3月。Mike Glavin の家の台所。マイクの母 Nanna がマイクの妻 Mena をなじる。ナーナは、嫁ぐ前のミーナの一家が乞食同然の貧乏暮らしだったことや、子がないことでミーナに悪態を吐く。

サイヴ(18歳)の母はサイヴが赤ん坊の時に病死し、父親はサイヴが生まれ

2) 2013年10月に現地で確認した際、店の表示は〈The Greyhound Bar〉ではなくて〈John B. Keane〉となっていた。

た数日後に、出稼ぎ先のイギリスの炭鉱で事故死したという。以後、サイヴは母の兄であるマイクの家で暮らしている。

結婚の斡旋屋 Thomasheen (40代、名前の意味は小トーマスまたはトーマス Jr.) が、サイヴを富農 Sean (55~70歳) の妻に斡旋するともちかける。ミーナは、サイヴの持参金が不要で、自分が謝礼をもらえて、姑のナーナを引き取ってもらえる、という誘いに心を動かされる。自分を嫌っている二人を厄介払いできると思ったミーナは、女性に教育は不要であり、いい亭主を得ることこそ幸福であると、ショーンとの結婚をサイヴに首肯させようとする。

サイヴに思いを寄せる Liam (19歳) は、サイヴの父親の従弟である。マイクは未婚の妹にサイヴを産ませて去った男の一族を毛嫌いしていて、サイヴが母親の二の舞を踏むことになるのを恐れる。

2週間後、結婚前夜。門付の音楽屋でもある鑄掛屋の Boccock 父子が訪れる。祝婚の歌が歌われる中、サイヴが密かに逃げ出したことがわかる。搜索の手はずに一同が慌てていると、水死したサイヴを抱えて、リーアムが入ってくる。鑄掛屋が追悼の歌を歌い、幕となる³⁾。

1958年、Joseph Tomelty (1911-95) の *All Soul's Night* (『万霊節の夜』、1949年初演) を観たキーンは、帰宅してすぐに自営のパブの厨房で『サイヴ』の執筆を開始し、6時間後の早朝に幕開けの場面を書き終える。2週間後には完成稿をダブリンのアベイ劇場に送るが、返事が来ることはなかった。しかし、地元リストウエルで活動する〈リストウエル・ドラマ・グループ〉が『サイヴ』の上演を決める。

トメルティ『万霊節の夜』——Kathleen は貧しい生い立ちから極度のしまり屋となり、夫 John と長男 Michael が手漕ぎの船で漁をして得た収入を、自身の預金口座に貯め込んでいる。マイケルは貧しい生活から抜け出すために、原動機付きの大きな船が欲しくてならず、母キャスリーンにその資金を懇願する。キャスリーンは応諾せず、マイケルは郵便局に勤める婚約者 Molly に、母キャスリーンの預金を黙って引き出すことを依頼する。モリーが断わると、マイケ

3) テキストは John B. Keane: *Three Plays* (The Meric Press, Cork, 1990) を使用。

ルは(当時はよくあったとされる)近くで座礁した船の荷を略奪しに出かける。ジョンは自分の兄が殺人罪で絞首刑になったこと、そのせいで思いを寄せていた女性と結婚できず、その思いをキャスリーンと結婚した後も依然として抱き続けていること、そのために夫婦仲がうまくいっていないことに引け目を感じていて、マイケルの心情を理解して励ましはするものの、妻キャスリーンに強く物を言うことはできない。

万霊節の夜、死者の霊が家に戻るという言い伝え通り、二人の霊が家に現れる。母キャスリーンに命じられて嵐の中ロブスター漁に出かけて以前に溺死した長男 Stephen の霊と、マイケルの霊である。霊となった兄弟は、母キャスリーンが自身の吝嗇ゆえに自分たちを死なせたが、いずれ死後の世界に入った折には悔恨するであろうと想いながら、夜明けとともに消えていく⁴⁾。

トメルティ『万霊節の夜』は、両親の死後に10歳で修道院に預けられ、農場の手伝いに出されたという生い立ちのキャスリーンに、人間の吝嗇と強欲を描いた戯曲と一般に評される。

この戯曲に加えて、男が富裕であるゆえに良縁と判断した両親が、17歳の娘を65歳の男に嫁がせたというパブでの噂話を、キーンは『サイヴ』の下敷きに用いたという。

主人公サイヴの名前は、キーンの妹シーラの古いゲール語名に由来する。

貧乏な育ちがミーナを卑賤にしたという設定は、『万霊節の夜』のキャスリーンと共通する。このミーナの欲と、家畜を売買するかのように結婚相手を斡旋するトーマシンの欲を軸に、『サイヴ』はきわめて単純に展開する。

マイクは父親のような愛情をサイヴに抱いていたにもかかわらず、妻キャスリーンに抗えず、サイヴとショーンの結婚に反対しきれない。しかし『万霊節の夜』のジョンが抱えていた内面の葛藤は、マイクにはない。ナーナは老いて息子一家に世話になっている負い目から抜け出せないままである。リーアムの若い力は、サイヴを守るほどの力たりえない。結果、欲の力は殺人的な力を揮って、悲劇的な結末へと導く。古くからの因習が、背景に弱よわしく作用しているが、その程度は浅い。たとえば女性でありながら、教育を受け、肉体労働

4) テキストは Joseph Tomelty: *All Soul's Night & Other Plays* (The Lagan Press, 1993) を使用。

が課されないサイヴが、ミーナたち古い世代には許せない、その程度である。

古くからの慣習に基づいた考えは、鋳掛屋にも示されている。鋳掛屋は鍋や釜や農機具の修理と農作業の手伝いをしながら、主に農繁期に合わせて各地を家畜とともに移動していた人たちである。定住する家や土地を持たないことに慣れた彼らは、現代では差別用語ということで「鋳掛屋 (tinker)」とは呼ばれず、「旅の人 (traveler)」と言われるようになったが、その社会的な位置づけは依然として低い (鋳掛屋としての本来の仕事がなくなってきているので、次第に消えゆく運命にある)⁵⁾。

『サイヴ』に登場する鋳掛屋の父子は、各地の出来事を詩や歌にして語り、事の本質をほのめかして、警鐘を鳴らすという役割をわずかながら果たしている。いずれ消える運命にある影のような存在が、因習の邪悪な面を暗示すると言えば、ギリシア悲劇のコロスの役割を想わせるであろうが、『サイヴ』の鋳掛屋父子にその効果は期待できない。

このように、キーンの処女作『サイヴ』の展開は、実に単純である。人びとの描き方は典型的であり、鋳掛屋父子が野辺送りのように歌を披露する最後の場面は、感傷が過ぎるとさえ言える。古くからの因習が根強い社会に生きている人びとと、経済的な欲深さを持った人たちを描いた単純明快な戯曲である。その主題は、貧困にさいなまれた生活においては、愛情よりは目先の利益が優先され、利己主義と古い慣習に囚われた頑なな意識は悲劇を招くということに尽きる。

この意味ではアベイ劇場開設に際して、1904年12月末に大反響を引き起こした John Millington Synge (1871–1909) の *In the Shadow of the Glen* (『谷間の陰』) のように、『サイヴ』はただひたすらに、人間の狭量で浅ましい姿の写実を試みた戯曲と言える。

『谷間の陰』が抑圧や苦難を疑問なく受け入れて、ただ黙って耐える人びとの凝り固まった諦念に鳴らした警鐘となり、それを自分たちへの侮蔑ととらえた人びとから大変な反感を買ったように、キーンのもとには匿名の非難の手紙が少なからず寄せられたという (*Self-portrait*, pp. 96–98)。

当時の手順としては普通のことだったので、キーンは書き上げた『サイヴ』

5) Baairbre Ni Fholoinn's "Introduction": *Irish Travellers* (Andrew Ward Fine Art Photographs, 2011) 参照。

を、国立劇場であるアベイ劇場に送るが、受け入れられず、結局、上演することになったのは、〈リストウエル・ドラマ・グループ〉という1943年旗挙げのアマチュア劇団であった。しかしながら、その後『サイヴ』はOff-Broadwayでの上演やラジオ・ドラマとしての放送がなされ、舞台ではアマチュア劇団の人気演目として上演され続ける(〈リストウエル・ドラマ・グループ〉は分裂し、キーンは新団体 The Listowel Players とともに行動するようになる)。

1959年、長男が生まれ、キーンは自身の父親にちなんで、ウィリアム(愛称ビリー)と名付ける。同年、前述のように、各地で『サイヴ』の上演が続き、2月には The Clare Drama Festival (1947年より開催)で最優秀賞受賞。3月17日、リメリックの The Playhouse Theatre で上演。4月26日、Athlone で開催の The All-Ireland Drama Finals で最優秀賞受賞。5月25日、〈リストウエル・ドラマ・グループ〉が、ダブリンの The Queen's Theatre で上演(1904年柿落としのアベイ劇場は、1951年7月に火災で消失したために、この時期はクィーンズ劇場を常設劇場としていた。Abbey Street にある本劇場での『サイヴ』上演は、改編版(=現在のテキスト)で1985年6月13日ということになる)。6月29日よりコークの The Southern Theatre Group が上演。『サイヴ』が各地で大変な好評を博している最中、キーンは次の創作に取り掛かる。

4

1959年春、キーンは戯曲2作目 *Sharon's Grave* (『シャロンの墓』)の執筆を始め、約3週間で書き上げる。12月、ロンドンでプロの俳優をしていた兄イーモン(34歳)を呼んで Dinzie 役に定め、稽古が開始される。イーモンはこの上演が縁で、Trassie 役の Maura Hussett (24歳、本業は教員)と結婚する。

1960年1月、キーン夫妻に二男 Conor が誕生する。

1960年2月1日(キーン31歳)、『シャロンの墓』が(今度もアベイ劇場での上演は果たされず)、コークの The Father Mathew Hall で初演となる(現在出版されているテキストは、1995年7月2日ダブリンの The Gate Theatre で上演された際の版である)。

『シャロンの墓』——1925年、(ケリー郡を思わせる)アイルランド南西部 Baltavinn 村の Carraig 岬近くにある Donal の家。屋根を葺く旅回りの職人 Peadar が仕事を求めて訪ねて来る。ドナルの娘トラッシーはピーダーに、病床の父親ドナルにはすでに司祭の終油が済んでいると説明する。

トラッシーの弟 Neelus (20代) が、「シャロンの墓」と呼ばれる伝説を語る——昔むかし、族長 Tryconnell の王女シャロンは金髪美人であった。醜女の侍女 Shiofra はシャロンに嫉妬し、シャロンの馬に呪いをかけた。シャロンは落馬して崖の穴に転落、しがみつかれたシオフラも一緒に転落した。風の吹く日は、二人の女の鳴き声が崖の下から聞こえてくる。その声を止ませるには、美男子と器量のよくない男を同時にその崖の穴に放り込まなければならない。

トラッシーの従兄で両足が不自由で僵のディンジーが、弟 Jack (20代前半) に背負われてやって来る。ディンジーはトラッシーの家と土地と家畜をすべて自分のものにすると宣言する。それらが手に入れば、不具者の自分にも女性が目を向けると信じ込んでいるのである。

民間療法を生業とする Pats (60代) が、ディンジーに言いつけられて、四六時中女のことを考えている狂人と噂されるニールスの治療に来る。パッツは「(悪魔よ、) 出て行け!」と叫びながら、ニールスの頭をハンマーで叩く。

翌日。ニールスが、シャロンのため息やすすり泣きや、シオフラが風に向かって叫び返す声が聞こえると言う。ディンジーが来て、警察がニールスを拘束しに来ると告げる。パッツが、ニールスは狂人でいずれ皆の首を絞めかねないと、報せたのである。ディンジーは駆けつけたピーダーと争ううち、トラッシーめがけてナイフを振りかざす。ニールスはそのディンジーを背負って「シャロンが僕を、シオフラがディンジーを待っている」と言って出て行く。やがて、ニールスがディンジーもろとも〈シャロンの墓〉に飛び込んだことが知らされる。パッツが来て、ニールスのおかげで「我われはディンジーの恐怖から解放された」と言う。ピーダーが「ニールスが死んだ責任はパッツにもかなりある」と断じると、パッツは二人の赤ん坊の為にまた訪ねて来ると、予言して出て行く⁶⁾。

ディンジーは異形ゆえに妻帯は不可と自虐的に自己判断し、身勝手な性的欲

6) テキストは John B. Keane: Sharon's Grave (The Progress House, Cork, 1995) を使用。引用箇所は拙訳。

望をトラッシーに向けている。また、土地を所有することに、取りつかれたように執着している。ディンジーの異形の姿は、この異様ぶりを視覚的に物語っているだけである。よって、この作品を、ニールスが双頭の怪物である魔物の兄弟を退治した一種の英雄譚と読み解くのは、作品の表層だけを見ているにすぎない。

サイヴを死に至らしめたのは、頑なな意識の底にある旧態然とした思考であったが、バンシーを信じるような古くからの風習、悪魔祓いを思わせるパッツの治療行為、異形のモノには魔性の力が宿るという根拠なき言説、これらはすべて、美醜二組を葬ったシャロンの墓の言い伝えと同次元にある旧弊な思い込みの概念である。パッツの療法を古い迷信めいたものとして切り捨てることがないトラッシーも、流れ者の職人ピーダーを差別し、彼の血筋を過去に遡って非難する村の人びとの目もこれと同質である。こうした旧弊な思考こそが異形なのであって、それは伝説の墓場に葬る意外に消せないものである。ニールスの行為が英雄譚たりうるとすれば、それはこの意味においてのみである。ニールスとディンジーに表象された不毛性は、ピーダーとトラッシーが結婚して新しい命を誕生させることによって相殺されるように思われるが、パッツの予言はまた歪んだ因習が忍び寄って来ることを暗示している。

5

1961年7月、*Many Young Men of Twenty* (『多くの二十歳の若者』) がコークにある〈ファザー・マシュー・ホール〉で初めて上演される。キーンは33歳、妻メアリーが第三子 John を出産する前のことである。

『多くの二十歳の若者』——1960年代の夏、ケリー郡の田舎町 Keelty, West Cork 鉄道の駅のそばにあるバーを、独身女性 Seelei が、ウェイトレスの Peg を使って切り盛りしている。Dawheen Timmineen Din と妻 Muanan が、働きに出る息子たち、Kevin (25歳) と Dinny (18歳) を見送りに来る。列車の発車前の時間をバーで過ごす人びとが繰り返してきた家族の別れの場面である。

ペグが未婚の母となった経緯をケヴィンに語る。ペグはケヴィンの胸に同情が芽生えたことを感じ取るが、安直な期待をしないように自らに言い聞かせる。

一年後。ケヴィンが帰って来る。弟ディニーは、新妻 Dot を伴っている。迎

えに来たディニーらの父ドゥインは、ドットの来し方よりも、彼女の宗派と持参金の有無が気がかりでならない。

ケヴィンがペグにデートを申し込む。ペグは自分に対するケヴィンの恋心をはかなく期待していたが、未婚の母となった自分の過去と、それゆえにたてられた町の噂を気に掛けて、ケヴィンの誘いに応じない。

一週間後。地元の議員 J. J. Houlihan と息子 Jonny (18 歳) が来る。議員は反英の闘志 Mikey Houlihan が自分の叔父であったことを自慢する。これに対して Maurice (30 歳) が、マイキー・フーリハンが祖母の家に水を運んで行く際に偶然に銃で撃たれたにすぎないと、その逸話の英雄性を否定する。さらに、モーリスは、無資格のジョニーが父親の口利きで、農地の賃料を集金する職に就いたことを批判する。モーリスは一年前に前任校を首になってこの町に流れてきた英語教師である。

ケヴィンがペグに求婚する。ペグは自分が未婚で子持ちであることと、ケヴィンが強く成り上がっていく気概に満ちていることを理由に断る。するとモーリスがペグに求婚する。モーリスは町に残り、ペグと子供とペグの両親を引き受けることを約束する。ペグは先刻モーリスが議員に向かっていったその勇気ある行為に心を打たれていて、モーリスの申し込みに首肯する。

ディン夫妻が、息子 Mick (16 歳) と娘 Mary (15 歳) を連れて来る。この若い二人もまたロンドンに働きに出て行くのである。バーの常連 Danger (50 代) が、アイルランドの無数の駅でこうしたむごい家族の別れの場面が繰り返されているにも関わらず、議員たる者がただ傍観していることに憤りの声をあげる。

バーの切り盛りをシーリーに任せきりで、役に立たないとされていた兄 Tom (40 代) が旅行鞆を持って現れ、家を出ていく決心をしたと述べる。

ペグが「多くの二十歳の若者がさようならと言った」と“Many Young Men of Twenty”を歌い始める。一同は合唱しながら駅に向かう。残ったモーリスとペグが抱き合って、幕が降りる⁷⁾。

1960 年代のアイルランド経済は慢性的な不景気状態にあった。職を求めて

7) テキストは John B. Keane: *Three Plays* (The Meric Press, Cork, 1999) を使用。

故郷を離れざるを得ない人びと (exiles) は、貧しいアイルランドの長く悲しい移民の歴史を繰り返していた。その別離の悲しさに秘められた弱者の憤りは、バーの常連デンジャーの憤慨に表れている。政治家の無策と偽善に対する怒りは、1952年に23歳でイギリスに出稼ぎに行ったキーン自身のものでもある。人びとを抑えつける力に対する反骨もまた、キーン作品に通底する主題であるが、いたずらに過去を賛美するだけの人びとの意識の低さもまたキーンが嫌うものである。

デンジャーが議員に憤慨した後、モーリスは、過去の紛争 (反英独立闘争) で英雄的言動があったことをいまだに自慢したがるフーリハン議員世代の懐古趣味を非難する。議員の名を「フーリハン」にしたのは、アイルランド神話から今に至る英雄賞賛の旧弊な精神を具現させたものと言える。

隸従が根付いてしまったかのような人びとの卑屈な意識は、政治家だけの問題ではない。とりたてて当時の農夫や下層の民に特有のものではないが、過酷な運命をただ受け入れ、物欲・金銭欲にとらわれている人びとの意識の卑しさは、農夫ディンに描かれている。出稼ぎの子供らに父親らしい忠告をする一方で、送金を強くせがみ、(古くからの風習が残っていたにせよ) 息子の新妻の持参金しか考えないディンの業突張りな様子には、その意識の低さを嘆うしかない。若い世代のドットが、夫ディニーが父ディンに与えようとしている小遣いを阻止する場面は、旧弊な意識へのささやかな叛旗と言える。

出て行く以外に未来がないような閉塞感には、信仰・宗教・教会も救いにはならない。デンジャーが都会に出る若者に、孤独と絶望を癒すものとしてキリストの写真を売りつけているのは、信仰が無力で俗に墮していることを皮肉っている。

いつまで経っても未来に目を向けることができないでいる人びとのこの諦念を払拭するには、内なる意識が強固な決意を示すしかない。それが穏やかに託されたのがトムである。トムはベグに町を出ることを勧めていた。自分の閉塞感の解消の肩代わりをベグに託したかったのである。しかし、現実には今の生活から抜け出せないままに無為に毎日を過ごしていた。それが最後には旅立つ決心をしたのである。

ベグの歌は、旅立ちは哀しい別れでもあるという現実の悲哀を深めている。ベグは「I am a servant girl.」と歌い、「多くの二十歳の若者がさようならと言った」と繰り返し歌う。

6

1961年9月(キーン33歳)、*The Highest House on the Mountain* (『山の一番高い所にある家』)が、ダブリン演劇祭参加作品として、ダブリン郊外のダン・リアリーにあるThe Gas Company Theatreで上演される。

『山の一番高い所にある家』——アイルランド南西部の農家。1960年頃の12月。Mikey (60代)の息子Patrick (30代)が、新妻Julie (30代)を連れて5年ぶりに帰って来る。パトリックは除隊後に出会ったEleanorに求婚して断られ、そのせいで酒に溺れ、荒んでいた時期にジュリーに救われたと言う。マイキーの弟Sonny (50代)は山の一番高い所にある家に一人で住んでいるのだが、クリスマスの時期なので今はマイキーの所に身を寄せている。ソニーは20年前に町で女性を襲ったと誤解されて以来、対人恐怖症とも思われる状態になっている。

家から放逐されていたConnie (30代)が帰って来る。ある少女が彼との恋愛の末に精神病院に送られたということがある、そのために父マイキーに追い出されていたのである。しかしコニーは、自身が農場の跡継ぎになるべく、兄パトリックが再び酒に溺れるように仕向けていく。ジュリーは、夫パトリックのアルコール依存症を再発させたとコニーを責める。コニーはジュリーが以前に娼婦だったと知って、ジュリーに言い寄るが、拒絶される。

パトリックが酔って事故死する。ジュリーが娼婦だったと知ったマイキーは、村の人びとや司祭の目を恐れ、妊娠しているジュリーを追い出そうとする。ジュリーは朴訥なソニーに心を動かされ、山で暮らすことに決める。

隣家の娘Sheila (20代)がコニーに魅かれる。それを察知したシーラの父親と兄弟たちが、悪名高いコニーを懲らしめにやって来る。結果、コニーは殴り殺されてしまう。息子を二人とも失くしたマイキーは、家の血が途絶えたことを嘆きながらも、コニーが勇敢に暴力に立ち向かったことを称える⁸⁾。

マイキーとコニーは浅ましい昔からの物欲と色欲を体現している。マイキー

8) テキストはJohn B. Keane: *Three Plays* (The Meric Press, Cork, 2001)を使用。

は放逐したはずのコニーを、土産のウイスキーと肉に魅かれて許してしまい、次第に農場の跡継ぎにするという期待を寄せて行く。それに呼応してコニーは、兄パトリックの破滅と自己の利益を求めていく。

パトリックが死んだ後、マイキーはジュリーが売春婦だったことを想い、出産を控えたジュリーの弱い立場につけ込んで、欲望の対象をジュリーに求める。ジュリーは拒絶する。

最後の場面でマイキーは、コニーの死を「わが血筋」の勇敢なる特質の顕れと自慢するが、この父子の血筋で露わにされてきたのは、愚かきわまりない浅ましき欲そのものである。その欲は、土地への代だいの執着に表されているが、この執着は以後のキーン作品に何度も描出されるものである。

しかし『山の一番高い所にある家』を、利己主義と強欲を弾劾する劇とする評は、的を射ていない。劇作4作目の登場人物たちには、各人各様に心の傷が設定されている。パトリックがエレノアを思い切れない心、ソニーの対人（特には女性）恐怖症、ジュリーの前歴とパトリックに愛情が通じなかった悲痛、マイキーの妻を亡くした悲哀と最後にはすべてを失う孤独、シーラの失恋、誰もが皆暗い影を胸の奥に抱えている。ここにキーン作品に通底する人間観が読み解ける——人間は誰も完璧ではないのだから、他人の心の痛みを深く思いやる優しさが必要なのである、と（既出、*Self-portrait*, p. 83, p. 95）。

最後に心を通じ合ったソニーとジュリーが向う所は、町にある人間の貪欲さ、愚かさとは無縁の場所——山の一番高い所ということになる。旧弊な物欲と色欲に囚われ続ける村と村の人びと、そこから隔絶された所に住む純朴な人びと、この対極関係は、都会の町と故郷という関係に置きかえられ、キーン作品にはたびたび描かれる。ダブリンやイギリスの町での人間関係は、華やかな外見の下にあって実は冷淡である。それに比して、時には愚昧にも見える地方には、心の交流がある。この思いは、1952年からイギリスに働きに行って2年を過ごしたキーン自身の故郷離脱者 (exile) としての思いであり、それは次の作品 *Hut 42* (『42 番小屋』、1968年初演) にも描かれることになる。